



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゴスチ考
Author(s)	栗生沢, 猛夫; Kuryuzawa, Takeo
Citation	スラヴ研究, 32, 1-25
Issue Date	1985
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5144
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113240.pdf



ゴ ス チ 考

栗 生 沢 猛 夫

は じ め に

前近代ロシアの大商人、ゴスチ *гость* をめぐる問題は、これまでにもしばしば論じられてきた。それは前近代ロシアにおける都市と商工業の発達、またブルジョア関係の発展とその程度、さらにはロシア社会のあり方そのものをめぐる、より広範な問題の一環をなしてきた¹⁾。だが興味深いことに、これらの問題は必ずしも同じ取扱いをうけてきたように

- 1) 以下に、個々のゴスチではなく、ゴスチを全体として扱った特殊研究を掲げておく。Сыроечковский, В. Е. *Гости-Сурожане*, М.-Л. 1935. (以下 Сыроечковский として引用); Amburger, E., "Zur Geschichte des Großhandels in Rußland: die Gosti," in: *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, Bd. 46, H. 2 (Juni, 1959), SS. 248-261; Baron, S. H., "Who were the Gosti?", in: *California Slavic Studies*, v. VII (1973), pp. 1-40 のちに Baron, *Muscovite Russia*, Variorum Reprints, London 1980 に再録。以下 Baron, Gosti と略記; Leitsch, W., "Die Stadtbevölkerung im Moskauer Staat in der 2. Hälfte des 17 Jahrhunderts", in: *Forschungen zur Osteuropäischen Geschichte* (以下 FOG と略記), Bd. 18 (1973), SS. 221-248; Knackstedt, W., "Moskauer Kaufleute im späten Mittelalter: Organisationsformen und soziale Stellung", in: *Zeitschrift für Historische Forschung*, Bd. 3 (1976), SS. 1-17; Epperlein, S., „Zur Rolle der Kaufleute und des Handels in der mittelalterlichen russischen Stadt. Forschungsergebnisse und Probleme zur Geschichte der russischen Stadt vom 10. bis 15. Jahrhunderts (II)“, in: *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, 1977, Bd. III, SS. 221-234; Флоря, Б. Н., "Привилегированное купечество и городская община в русском государстве. Вторая половина XV-начало XVII в.", в: *История СССР*, 1977, № 5, стр. 145-160. 以下 Флоря, Купечество と略記。

以上からも伺えるように、ロシア・ソ連邦にはゴスチを全体として扱った研究は少ない。もちろんロシアにも、Костомаров, Н. *Очерк торговли московского государства в XVI и XVII столетиях*, СПб. 1862 (стр. 139-144) 以来ゴスチ研究の伝統がないわけではないし、革命後には幾多の個別研究が現れて、情報量は非常に多くなってきている。とくに重要なのは Базилевич, К. В., "Крупное торговое предприятие в московском государстве в первой половине XVII в." в: *Известия АН СССР*. VII серия. № 9 (1932) стр. 783-812 (Босов 家に関する研究); Бахрушин, С. В., "Торговые крестьяне в XVII в." в его: *Научные труды*, т. II (М. 1954), стр. 118-133 (Федотов-Гусельников 家や Г. Р. Никитин に関する言及。同論文は 1928 年の発表); его же, "Промышленные предприятия русских торговых людей в XVII веке". в: *Научные труды*, т. II, стр. 224-255 (Светешников 家や Гурьев 家に関する研究。1940 年の論文); его же, "Торги гостя Никитина в Сибири и Китае", в: *Научные труды*, т. III, ч. I (М. 1955) стр. 226-251. (1926 年の論文); Александров, В. А., "Сибирские торговые люди Ушаковы в XVII в." в кн.: Устюгов, Н. В. и др. (ред.) *Русское государство в XVII веке*, М. 1961. стр. 131-150.; Тверская, Д. И., "К вопросу о роли купечества в процессе формирования всероссийского рынка в XVII в." в кн.: *Новое о прошлом нашей страны*, М. 1967, стр. 290-300 (В. Шорин に関する研究)。さらに Baron, Gosti, p. 1, note 1. を参照。だが、ソ連邦でのゴスチ研究の立ち遅れは明らかで、今後の総合的な研究の出現が待たれるところである。

欧米では上に掲げたもの以外に、モスクワ・ロシアの商人に関する二つの包括的な研究が重要である。Kaufmann-Rochard, J. *Origines d'une bourgeoisie Russe (XVI^e et XVII^e siècles). Marchands de Moscovie*. Paris, 1969.; Bushkovitch, P. *The Merchants of Moscow. 1580-1650*. Cambridge Univ. Press, 1980. だが欧米でとくに注目されるのは S. H. バロンの研究であ

はみえない。都市と商工業の発達全般に関わる問題においては、史家の立場は大きく二つに分れていたのにたいし、ゴスチの性格をめぐるには、それはほぼ一致しているようにみえるからである。すなわち、都市全般に関する問題においては、ロシアにおける発達の程度を、西欧と比較して、著しく劣るものとみて、ロシアの後進性を強調するものと、若干の時期的遅れや地理的特殊性等に起因するロシアの独自性は承認しながらも、基本的にはその発展を西欧に比しうると考えるものが明確に対峙していた。これにたいし、ゴスチに関しては、ほとんどすべての研究者がその不活発で、脆弱な体質を指摘することで止まっていたのである。ゴスチは国家の側からの様々な要求の前に精力を奪われ、ブルジョア関係の発展には必ずしも寄与しなかった、と説かれていた。一つだけ例をあげると、科学アカデミー・歴史研究所編の12巻本『最古から現代にいたるソ連邦史』第三巻第一章は、17世紀における全ロシア市場の形成に、ゴスチを頂点とする商業資本が大きな役割を果たしたことを強調しながら、次のような留保を行う必要があると考えている。「(大商業資本は)安定性に欠け、初代資本家を越えて次代に伝わることは極めて稀であった。幾分でも組織的な信用制度の欠如、貨幣手段の流通の緩慢性、資本の没収をも辞さぬ政府の過酷な財政政策がその原因であった。」²⁾

小稿はこのような見解に異を唱えようとするものではない。モスクワの特権商人階級が中世西欧都市の同僚たちと、いくつもの異なる特徴をそなえていたことは、否定すべくもないからである。しかし長期間にわたって存在したゴスチを、最高度に成長し、それゆえにまた、問題性が明瞭に現われるにいたった17世紀のゴスチに関する画像から直接的に理解し、結論づけることはさし控えなければならない。当然のことだが、ゴスチの存在は、その成長と変遷の過程に注意しながら歴史的に見ていく必要がある。このような立場に立つとき、筆者にはゴスチの歴史が明瞭に二分されるように思われる。すなわち、ゴスチ=スロジャーネとよばれる一群を中心とする14-15世紀のゴスチと16世紀末-17世紀のゴスチとにである。後述するように、両者にはいくつかの明瞭な、本質的相違がある。

る。彼には上記 Gosti 論文のほかに、17世紀の代表的ゴスチを扱った“Vasilii Shorin: Seventeenth-Century Russian Merchant Extraordinary” in: *Canadian-American Slavic Studies*, v. VI. no. 4 (1972) pp. 503-548 及びゴスチの最後を扱った“The Fate of the Gosti in the reign of Peter the Great” in: *Cahiers du Monde Russe et Sovietique*, v. XIV. no. 4 (1973), pp. 488-512. (ともに Baron, *Muscovite Russia* に所収) がある。バロンはその“The Weber Thesis and the Failure of Capitalist Development in ‘Early Modern’ Russia” in: *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, Bd. 18, No. 3 (1970). SS. 321-336 (のち Baron, *Muscovite Russia* に所収) 以来、モスクワ・ロシアの商工業・都市発展の程度を低く見る伝統的な立場に立っていたが(彼の上記諸論文におけるゴスチ観も同様で、ゴスチの商人・企業家としての活動は不十分なものとされている)、その後自己の立場にやや修正を加え、ロシア商人・企業家の活動をある程度評価するに至っている。See. his *Muscovite Russia*, pp. ii-iii; Baron, “Entrepreneurs and Entrepreneurship in Sixteenth/Seventeenth Century Russia” in: *Entrepreneurship in Imperial Russia and the Soviet Union*, ed. by G. Guroff and F. Carstensen, Princeton Univ. Press, 1983. pp. 27-58. なお土肥恒之, 「ロシア近世経済史研究の新動向」『商学討究』(小樽商大), 29-4 (1979) 25-32 ページにバロンの研究への言及がある。

- 2) *История СССР с древнейших времен до наших дней*. Первая серия, под ред. Б. А. Рыбакова и др., т. III. М. 1967, стр. 30 (この部分は А. А. Преображенский の執筆。彼は17世紀ロシアにおけるブルジョア関係の発展を強調する研究者の一人である。なお本稿の引用文中における括弧は特に断りのない場合は、引用者すなわち栗生沢の補足である。) さらに後述注 56, 74 をも参照。

だが他方では、多くの史家が行うように、両者をまったく関連のない別個の存在として切り離すのも正しいとは思えない。おそらく、16世紀を過渡期としてゴスチは大きく変質した、と考えるべきである。問題はそれゆえ、この時期に、何故、どのようにしてゴスチの性格に変化がおきたのか、それはモスクワ国家の形成過程といかなる関係にあったのか、ということになる。小稿においては、まず、ゴスチとは何かについて、その時代ごとの展開過程を示し、ついでこの問題を検討することにした。

I. ゴスチとは何か

1. 初期のゴスチ

ゴスチの存在は早くから知られていた。それはすでに『原初年代記』944/945年の項にみえる。この年に結ばれたロシア・ビザンツ条約が、ロシア側使節団のなかにゴスチが加わっていたことを伝えている³⁾。ただこの頃のゴスチの実態は、彼らが武装した、略奪的商人であったということ以外にはあまり分っていない。

この時代、商取引 *купля* に従事する者を一般的には *купец* ないし *купчина* と言ったが、ゴスチはとくに他都市また外国との取引に従事する者、さらには他都市また外国からの商人をさすことが多かった⁴⁾。国内取引を *купля*、外国（ないし異なる地方）との取引を *гостьба* とする『ルースカヤ・プラウダ』の用法はこれに由来している。もっとも *купец* と *гость* の区別は絶対的なものではなく、とくに13世紀以来史料に現われるようになった *торговник* ないし *торговец*, *торговые люди*——主に市場に小さな店をもっている商人をさした——と比較した場合、両者はともに、多少なりとも大規模な取引に従事する商人を意味していた。しかも14世紀中葉以降、遠隔地貿易に従事する *купец* や *торговец* も現われるので、この区別はますます不明瞭になる。そしてその結果単なる商人をさしてゴスチとよぶ用法すらも現れる⁵⁾。その意味では、外国貿易に従事する者、より狭義では他都市との取引に従事する者をゴスチと固定化するクリュチーフスキーの規定⁶⁾は、十分ではない。現実には用法は極めて多様であったと考えるべきである。15世紀末—16世紀になっても、同一人物がゴスチ、*купец*, *торговый человек* と呼ばれてい

3) 『原初年代記』、日本古代ロシア研究会訳、『古代ロシア研究』第4巻(1964)18頁以下。

4) ラテン語の *hostis* に由来する中世ロシアのゴスチや、商人に関する用語の語法については、M. ファスマーや、И. И. スレズニェーフスキーの辞典および、アカデミー版 *Словарь русского языка XI-XVII вв.* (M. 1975~) の該当箇所のほか、とくに以下を参照のこと。Rahbek-Schmidt, K., *Soziale Terminologie in russischen Texten des frühen Mittelalters (bis 1240)*, Kopenhagen 1964. S. 480, 485-486; Тихомиров, М. Н., *Древнерусские города*, изд. 2-е, М. 1956. стр. 152-158; Черепнин, Л. В. *Образование русского централизованного государства в XIV-XV веках*. М. 1960, стр. 415-418; Knackstedt, W., *Moskau. Studien zur Geschichte einer mittelalterlichen Stadt*. Wiesbaden 1975, SS. 107-109, 117-119 (以下 Knackstedt, *Moskau* と略記)

5) Сыроечковский, стр. 37. またノヴゴロドではゴスチは特別な身分をなさず、単に商人を意味しただけであった。Соловьев, С. М., *История СССР с древнейших времен*, кн. II. М. 1960, стр. 536.

6) Ключевский, В. О. “Терминология русской истории”, в его: *Сочинения*, т. VI. М. 1959, стр. 150.

る例があったほどである⁷⁾。

2. 14-15 世紀のゴスチ——ゴスチ・スロジャーネとスコニキ

バトゥの遠征とそれに続くタタール支配の下で、モスクワ公国が次第に頭角を現わしてくる。タタール軍による度重なる侵入と破壊行為にもかかわらず、14 世紀も中頃になるとロシアの復興は誰の目にも明らかとなる。このような経済的上昇気運にのって、モスクワ公国内に二つの、多少なりとも明確な商人グループが形成されてきた。ゴスチ・スロジャーネとスコニキである。

スロジャーネ Сурожане とは、クリミア半島のヴェネツィア（1365 年以降はジェノヴァ）の植民市スダク Судак（ロシア名スロジ Сурож）から派生した語である。「スロジャーネ」は 1288 年に、「ゴスチ・スロジャーネ」は 1365 年に初めて史料的に確認できるが⁸⁾、それはおそらく、元来スロジを中心としたクリミア方面からモスクワを訪れた商人（とくにイタリア人）をさしたものであろう。だが 14 世紀のうちに、それはすでに「南方諸市場において交易し、同時にモスクワでもっとも有力な地位を占めるにいたった商人たち⁹⁾」をさす語になっていた。

ゴスチ・スロジャーネに関する古典的労作を著わした B. E. スィロエチコーフスキーによると、それは何よりも、クリミアを中心とする南方および東方諸地方との交易に従事する遍歴商人であった¹⁰⁾。彼らは必要に応じてキャラバンを組織し、多くの場合外交使節団に加わってクリミアへむかい、そこを根拠地にしてさらに遠方と交易を行った。スィロエチコーフスキーはモスクワ商人のクリミア貿易について、主な舞台と径路（45～53 ページ）、輸出入品の種類（53～68）、遍歴商人の組織（68～75）、交易の規模、個々の商人の資本額（75～82）、交易に加わった商人の社会的構成（82～95）、封建階級の果たした役割（95～103）、モスクワ大商人階級の特徴（103～110）等について詳しく検討している¹¹⁾。スロジャーネは、おそらくはこのような東方貿易により財をなした、モスクワの最も富裕な商人グループであった。彼らは、おそらくはゴスチの最も有力なグループとして、社会

7) Knackstedt, *Moskau*, S. 118.

8) Сыроечковский, стр. 12-17, さらに松木栄三「14-15 世紀の黒海沿岸とロシア」、『地中海論集』（一橋大学地中海研究会）、東京 1984. 59-63 頁を参照。

9) Сыроечковский, стр. 18.

10) Там же, стр. 34-35.

11) ただしスィロエチコーフスキーの検討するのは 15 世紀末—16 世紀初頭の事例であることは念頭に入れておかなければならない。これは後述するようにスロジャーネの消滅した後のことである。それゆえ著者がここで述べていることは、厳密に言えば、スロジャーネではなく、ゴスチに関することである。

そこでここで「スロジャーネ」という語について、さらに一言しておかねばならない。この語は主に年代記に現われる語で、諸公間条約等の公式文書では用いられていない。年代記には、「ゴスチ・スロジャーネ」、「スロジャーネ、スコニキその他の商人 купцы」などという表現が出てくるが、公式文書では「ゴスチとスコニキ」しか出てこない。それゆえゴスチとスロジャーネ、スコニキが相互にどのような関係にあったのかは、簡単には言えない。14, 15 世紀のモスクワ上層商人一般をゴスチとし、その一部としてスロジャーネとスコニキがあったとするクリュチーフスキーやクナックシュテットの見方は、用語の流動的用法を無視した、あまりに単純な見方である。см. Ключевский, В. О., *Сочинения*, т. VIII, М. 1959, стр. 42; Knackstedt, "Moskauer Kaufleute", S. 7; Сыроечковский, стр. 26, 37.

的にも貴族や高官に次ぐ地位を占めていた。彼らの中には資金を諸公に貸しつけ¹²⁾、諸公間の紛争に際しては一方に肩入れする者もいた¹³⁾。また土地を購入し、なかには貴族の地位にまで登りつめる者もいた。

ところでスロジャーネについて幾らかでも具体的に知ろうとすると、忘れてならない記事が年代記 1380 年の項にある。ママイ汗の軍を迎え撃つために、クリコヴォの野に出陣したモスクワ大公ドミトリー・ドンスコイは、このとき 10 名のスロジャーネを従えていたが、その氏名が年代記に挙げられているのである。それはヴァシレイ・カピツァ、シドル・エルフエーリエフ、コンスタンチン、クジマ・コヴェリャ、セミオン・オントノフ、ミハイロ・サラレフ、チモフェイ・ヴェジャコフ、ドミトレイ・チョールノイ、デメンテイ・サラレフ、イヴァン・シフである¹⁴⁾。

このうちヴァシレイ・カピツァは『エルモーリン年代記』で知られる、エルモーリン家の祖先であったと考えられる。M. H. チホミーロフによると、この商家は五代にわたってその歴史を辿ることができる¹⁵⁾。家名はカピツァの息子エルモラに由来する。彼も商人であったが、晩年トロイツァ修道院で剃髪した。一門で最も名高いのはエルモラの子ドミトリーとその子ヴァシーリーである。ドミトリーは 15 世紀中葉のモスクワで最も高貴な人物の一人であった。彼は祖父カピツァと同様ゴスチ・スロジャーネであり、広く旅をしていたのであろう。ギリシア語、ポーロヴェツ（タタール）語を話すことができた。彼も晩年トロイツァ院で出家している¹⁶⁾。ヴァシーリー・ドミートリエヴィチはイヴァン三世治世初期のモスクワで最も著名な建築家の一人であり、前記『エルモーリン年代記』を編纂させた人物でもあった。彼はクレムリ内に自己の居館を有しており、娘は貴族の子で、イヴァン三世の寝殿官 Д. В. Бобулと結婚していた。彼が商業活動に従事し続けたかどうかは不明である。エルモーリン家は、とくにドミトロフ郷で領地の購入と拡大に努めたことでも知られている。

一層興味深いのはホヴリンーゴロヴィン家の例である。この家系は 16 世紀の公式的『系譜書』に入るほどの名門であるが¹⁷⁾、その祖先は、当のホヴリン家が主張するようにクリミア出身のステパン公ではなく、上記のクジマ・コヴェリャであると考えられている¹⁸⁾。もっともこの場合、ステパンが単なる架空の人物なのか、クジマと同一人物とみるべきなのかは不明である。クジマ自身クリミアの出身であった可能性はある。クジマの子グリゴリー・ホヴラ（父称はステパノヴィチである）もゴスチで、ホヴリンの家名は彼に由来

12) この点に関しては、Семенченко, Г. В. “Кредиторы удельных князей московского дома в конце XV– начале XVI века”, в: *Вопросы истории*, 1982, №. 11. стр. 84–94. をみよ。

13) Сыроечковский, стр. 36–37.

14) *Полное собрание русских летописей*, (以下 ПСРЛ と略記) т. XI, (ニコン年代記) М. 1965, стр. 54.

15) Тихомиров, М. Н., *Средневековая Москва в XIV–XV веках*, М. 1957, стр. 152–155. さらに Knackstedt, *Moskau*, S. 122 をも参照。

16) ドミトリー・エルモーリンについては、とくに Черепнин, *Образование*, стр. 433–436 をみよ。

17) Бычкова, М. Е., *Родословные книги XVI–XVII вв.* М. 1975, стр. 34–35. и др.

18) Тихомиров, *Средневековая Москва*. стр. 155. ホヴリン家全体についてはさらに Knackstedt, *Moskau*, S. 122 を参照。

する¹⁹⁾。彼はシーモノフ修道院の寄進者として知られ、そこに木造教会を建てている。グリゴリーの子ウラジーミルは、1450年に「ゴスチにして大公の貴族」とよばれている。大公位をめぐる困難な闘いの最中であつたヴァシーリー二世盲目公に、財政的援助を惜しまなかつたことが、ウラジーミルへの貴族の称号授与につながつたのであろう。彼はさらに大公の財務長官ともよばれている。ウラジーミルの子ドミトリーも大公の財務長官で、クリミア貿易に従事していた。ドミトリーの兄弟イヴァン・ゴロヴァ——ゴロヴィン家の名は彼に由来する——は建築請負人で、上述のヴァシーリー・エルモーリンとともにモスクワ・クレムリ内のウスペンスキー寺院建築に従事した。彼も、貴族になった可能性がある²⁰⁾。ウラジーミルとその二人の子はイヴァン三世の弟たち(アンドレイ公、ユーリー公)の債権者としても知られている²¹⁾。ホヴリン—ゴロヴィン家は16世紀に入つても商業とのつながりを保っていたが、それも漸次うすれ、典型的な貴族家門となつていった。

エルモーリン家とホヴリン—ゴロヴィン家は単によく知られた商人家系の例としてのみならず、モスクワ大商人の封建貴族への上昇過程を示すものとしても興味深いが、10人のスロジャーネの他の者たちの場合は、社会的上昇の具合はそれほどのものではなかつた²²⁾。

さてスロジャーネについて言及するとき、避けて通ることのできぬ問題がある。彼らが特権団体として組織されていたかどうか、また彼らには勤務義務があつたかどうかの問題である。

ゴスチはすでに14、15世紀に、その称号を大公から得ており、それゆえに一つの明確な特権団体として、モスクワ国家のなかで、半ば勤務人階級的な地位をしめていたことが、早くから主張されている。たとえばM. Ф. ウラジーミルスキー・ブダーノフがそうである²³⁾。M. Н. チホミーロフはこの立場をさらに展開させ、14-15世紀のゴスチが「西欧のギルド型の団体」を組織していたと主張するにいたつている²⁴⁾。その際彼らが提出する論拠はおおよそ以下のようなものである。

- ①大公ドミトリーがノヴォトルジョクのエウセフカに与えた恵与状(1363-1374年)——エウセフカはコストロマへの移住に際して、一定の貢納を条件に貢租や取引に関わるすべての税を免除され、さらに法的特権(大公の千人長の庇護を受ける)をうけている²⁵⁾。
- ②大公ドミトリーが(ノヴォ)トルジョクのみクーラとその子供らに与えた恵与状(1363-

19) Веселовский, С. Б., *Ономастикон*, М. 1974, стр. 340.

20) Там же, стр. 82.

21) Семенченко, “Кредиторы удельных князей”, стр. 88.

22) Тихомиров, *Средневековая Москва*, стр. 151-152; Knackstedt, *Moskau*, SS. 122-123 を参照。

23) Владимирский-Буданов, М. Ф., *Обзор истории русского права*, изд. 6-ое, СПб./Киев, 1909 (Russian Reprint Series XXIX, the Hague 1966), стр. 127.

24) Тихомиров, *Средневековая Москва*, стр. 156-160; его же, “О купеческих и ремесленных объединениях в древней Руси (XI-XV века)”, в: *Вопросы Истории*. 1945, №. 1. стр. 28.

25) *Дополнения к Актам историческим, собранным и изданным Археологическою Коммиссиею*, (以下 ДАИ と略記), т. I. СПб. 1846, №. 8. (= *Акты социально-экономической истории северо-восточной Руси конца XIV-начала XVI в.* [以下 АСЭИ と略記] т. III. М. 1964. №. 238)

1389年) ——ミクーラらは同市の代官の法的管轄下から解かれ、他の市民の支払う貢租を免除されている²⁶⁾。

③いわゆるドヴィナ行政法の第14-16条(1397年) ——ドヴィナのゴスチが税制および司法上の様々な特典と取引上の便宜を与えられている²⁷⁾。

小稿ではこれらの論拠を詳細に検討することはできない。だがチホミーロフらの見解が十分に立証されたものでないことは容易に指摘できるように思える。

まず、上の①と②がゴスチ、それも一般的に当時のモスクワ大公国のゴスチ全体に適用されうるものであるかどうかは、大いに疑問である。少なくともモスクワに関してはこのような文書は残っていない。これらの文書はむしろ、当時の政治状況に促されて出された可能性が強い。従って例外である。当時モスクワはノヴゴロド、そしてトヴェーリと緊張関係にあり、大公はモスクワの影響力拡大に努めていた。この点はЛ. В. ЧЕРЕПНИНが強調するところである²⁸⁾。

③のドヴィナ地方のゴスチに対する特典の付与も「ドヴィナ商人をノヴゴロドから離しモスクワに惹こうとする意図のあらわれ」²⁹⁾であり、これまた当時の政治状況との関連なしには考えられないものである。それゆえこれも例外と考えるべきである。

チホミーロフはさらに年代記の1479年の項に注目している。この年イヴァン三世は、「古くからモスクワ・ゴスチらの建造物であった」木造の聖金口ヨアン教会を、石造に新築させたという記事である³⁰⁾。彼はこれをゴスチ団体の守護教会と理解している³¹⁾。だが、この年まで木造で、しかも朽ちはてていたと言われる教会を守護教会とし、そして大公の力を借りてやっと石造にしえたというゴスチ団体とは、一体どのような団体であったのだろうか。何よりもこの「モスクワ・ゴスチら」が団体としてそれを所有していたのかどうかは明示されていないのである。それは既述のエルモーリン家やホヴリン家のゴスチたちが行ったように、個々のゴスチらの修道院への寄進行為と関連していたかもしれないのである。

ところで、モスクワ国家では特権と勤務は、しばしば表裏一体をなすものと考えられている。これは必ずしも正しい考え方ではないが、ゴスチ問題の際にもそれが出てくる。すなわち、ゴスチが特権団体であったと考えるチホミーロフらは、ゴスチには大公への勤務義務のあったことをも主張する。その際の主要論拠は、1389年に大公ドミトリーがセールプホフ-ポーロフスク公ウラジーミル・アンドレーエヴィチと結んだ条約中の、「ゴスチとスコニキそして都市民を共同の保護下におくも、彼らを勤務にとつてはならない」³²⁾と

26) ДАИ. т. I. №. 9 (=АСЭИ, т. III. №. 178)

27) これについては、石戸谷重郎「1397年のドヴィナ行政法をめぐる諸問題(承前)」、『奈良教育大学紀要』(人文・社会科学)第15巻(昭和42年)を参照。

28) Черепнин, Л. В., *Русские феодальные архивы XIV-XV веков*, ч. II. М. 1951, стр. 117-118.

29) 前掲石戸谷論文 34頁。

30) ПСРЛ. т. VIII. стр. 200-201; т. XXV, стр. 323.

31) Тихомиров, *Средневековая Москва*, стр. 157-158.

32) *Духовные и договорные грамоты великих и удельных князей XIV-XVI вв.* М.-Л. 1950. №. 11, стр. 32. この規定は1472年のイヴァン三世とアンドレイ・ヴァシーリエヴィチ・ウーグリチ公との条約(ДДГ. №. 66, стр. 216)にもみえる。

する条項に求められている。すでに C. M. ソロヴィヨフがこの勤務を都市民全体（ゴスチも庶民も含めて）の軍事勤務と解し、ここでは都市民を諸公軍に編入することが禁じられている、と主張したのにたいし³³⁾、M. A. ディヤーコノフはこれをゴスチの財政政策上の勤務と理解していた³⁴⁾。チホミーロフはこの両者を批判して、これはモスクワを共同で統治するいずれかの公の「家臣」《слуга》-вассал となることをさしており、もしそれを認めれば「スロジャーネやスコニキの団体的特権」が破られることになり、それゆえそれを禁じた上の条項は、ゴスチの団体的特権を保護しようとするものである、と説いた³⁵⁾。

筆者にはチホミーロフの解釈は問題を含んでいるように思われる。第一に、上の条項は、ソロヴィヨフが考えたように、ゴスチとスコニキのみならず、一般の都市民にもあてはまるものであることにチホミーロフは注意していない³⁶⁾。かりに、彼の説く如く、いずれかの公の「家臣」になることが禁止されているとしても——一般の庶民が「家臣」になるとは一体どういうことであろうか——、そのとき破られるのが何故ゴスチだけの特権になるのだろうか。それとも一般庶民もゴスチと同様の特権をもっていたのであろうか。そうなるとゴスチと庶民の違いはどこにあることになるのだろうか。チホミーロフの解釈はこれらの諸点に答えることができない。第二に、チホミーロフは上の論述に続いて、「ではこれらの団体的特権とは何であろうか」と自問し、「それについてはモスクワ・ゴスチに与えられた後代の諸文書によって判断することができる」と自答し、1598年の文書（後述）を引き合いに出している³⁷⁾。これは筆者が小稿の冒頭において指摘しておいた、非歴史的手法以外の何ものでもない。

チホミーロフの解釈には、すでに A. M. サハロフ³⁸⁾とチェレプニーンが批判を加えていた。ことにチェレプニーンは、上の条項と都市ボサード民が封建領主の庇護民になること（いわゆる *закладничество*）を禁じた規定とが本質的には同様のものであると考えている。彼によれば、これら二種類の規定は、ゴスチをも含む全ボサード共同体の保全を図ったものである。それらは1382年のトフタムィン汗によるモスクワ破壊とその際のモスクワ・ボサード民の暴動事件との関連で成立した。これらの事件の後、納税者組織であったボサード共同体の保全という課題がボサード民にとっても、統治者の側にとっても緊急のものとなった。こうして、一方では都市ボサード民の側からのつき上げ（暴動）、他方では収入を確保しようとする統治者側の意向の双方から、上の条項は成立した。モスクワ大公にはまた、モスクワ市民の支持を必要とする政治状況のあったことも忘れるべきではない。それゆえ、ここにとくにゴスチとスコニキの特権の保全が図られている、とみることはできない³⁹⁾。

33) Соловьев, *История России*, кн. II, стр. 527, 537.

34) Дьяконов, М. А., *Очерки общественного и государственного строя Древней Руси*, изд. 4-ое, М.-Л. 1926, стр. 236-237.

35) Тихомиров, *Средневековая Москва*, стр. 159.

36) 上記注 33. см. Сыроечковский, стр. 32.

37) Тихомиров, *Средневековая Москва*, стр. 159-160.

38) Сахаров, А. М., *Города северо-восточной Руси XIV-XV веков*, М. 1959, стр. 165-168.

39) Черепнин, *Образование*, стр. 418-422.; его же, *Русские феодальные архивы*, ч. I. стр. 44.

以上のチェレプニーンの見解に問題がないわけではない。とくに14世紀の段階で、全ポサード民の「自己の権利を求める闘争」と、統治者によるその尊重について明確に語れるのかどうか、慎重な検討を要する問題のように思う。少なくとも1382年のポサード民の暴動をこのような意味で理解することは無理である。だがいずれにせよ、チホミーロフのゴスチ論が成立しえないとする筆者の見解は、チェレプニーンによっても裏づけられていると思う。

さてゴスチ・スロジャーネについて必要と思われる点は上に記された。ところで「ゴスチ」(またある程度は「スコニキ」もだが)という語はひき続き16世紀にも用いられたのにたいし、「スロジャーネ」は15世紀末にはもはや史料には現われなくなる⁴⁰⁾。その後は、モスクワその他の諸都市の市場にある「スロジ」店街——クリミアから輸入された絹商品や宝石が売られていた——などのうちに、スロジャーネの名残りがわずかに留められたにすぎない⁴¹⁾。これにはもちろん理由があった。モスクワ・クリミア貿易そのものが衰退し始めていた。スロジはすでに14世紀末には、クリミアにおける主要中心地の座をカップアに譲り渡している。15世紀には史料におけるクリミア貿易に関する言及はほとんど影をひそめている。15世紀末から史料は急にふえるが、16世紀に入ってからクリミア貿易の衰退は明らかであった。トルコとの間に直接的関係が樹立され、クリミアの意味は下がった。他方では白海やカスピ海経由の航路が開かれ、シベリア方面への進出が始まった。16世紀のゴスチはもはやスロジャーネとは別の人々によって構成されていたのである⁴²⁾。

スロジャーネと並ぶ商人グループ、スコニキ *суконники* の実態はよく知られていない。それは *сукон*, すなわち主に西欧のラシャを扱った商人をさした語である。西欧、とくにフランドルのラシャは遅くとも、13世紀末にはノヴゴロドを経てロシアにも入っていた⁴³⁾。モスクワのラシャに対する需要の多くは、ノヴゴロド経由で満たされていた。だが

40) 1469年のカザン遠征にスロジャーネも加わっていたが、これがスロジャーネへの言及の最後の例のようにみえる。(ПСРЛ. т. XXV, стр. 281).

41) Даль, В. の *Толковый словарь живого великорусского языка* に〈Суровской〉及び〈Сурожанин〉という項目がみえる。

一つ重要な例外がある。モスクワ地方で〈スロジャーネ〉が忘れさられて行く一方で、16世紀のノヴゴロドに、それは忽然と現れる。ノヴゴロド第二年代記、1549年の項(ПСРЛ. т. III, стр. 153)に〈двор сурожской〉が焼失したという記事が見えるのである。他の史料からノヴゴロドの〈スロジャーネ・ゴスチ〉は16世紀同市の最上層の商人階級を構成していたことが分る。ここで重要なのは、14、15世紀のモスクワの史料に見られたスロジャーネがノヴゴロドでは16世紀になるまではまったく知られていなかった、という事実である。そこでシロエチコフスキーは、ノヴゴロドのスロジャーネは15世紀末のモスクワ政府によるノヴゴロド併合と、ノヴゴロドからの商人らの強制移住(вывод)の際に、モスクワからノヴゴロドに代りに送りこまれたスロジャーネたちと推定している。(Сыроечковский, стр. 111-112)。モスクワ・スロジャーネとして名高かった *Саларев* 家や *Боровитин* 家、*Тараканов* 家などの者たちが、16世紀ノヴゴロド・スロジャーネ(ないしゴスチ)のうちに見出されるところから、シロエチコフスキーの説は極めて説得的である。これについては、さらに *Пронштейн, А. П., Великий Новгород в XVI веке, Харьков, 1957, стр. 142-145* をも参照、*Бронштейн* もシロエチコフスキー説をとっている。

42) Сыроечковский, стр. 110; Фехнер, М. В. *Торговля русского государства со странами Востока в XVI веке*. М. 1956, стр. 7.

43) ロシアにおける西欧のラシャの輸入については、*Хорошкевич, А. Л., Торговля Великого Новгорода в XIV-XV веках*. М. 1963, 第二部(輸入)第一章(織物)стр. 160-213 を参照のこと。

14, 15 世紀のモスクワとリトワ及びトヴェーリ諸公との条約が、ゴスチに自由通行権を保証するよう、再三にわたって規定していたとすれば⁴⁴⁾、モスクワもスモレンスクやポロツク経由の独自の輸入ルートをもっていたと推測することができよう。いずれにせよ、15 世紀末にはイギリスの毛織物がリヴォニア経由で、ヴィテプスク、ミンスク、スモレンスク等を経てモスクワに輸入され、一部はさらにクリミア方面にまでもたらされていた。

このような対西欧貿易を背景に出現したスコニキであるが、史料に初めて現われるのはおそらく 1382 年のことである⁴⁵⁾。だが個々のスコニキについての 具体的史料に乏しく、その数についてはもちろん、はたして彼らが西欧との貿易に専心していたかどうか、取扱い品はラシャ以外に何があったのかなど、ほとんど知られていない。そして 15 世紀末には彼らも史料から次第に姿を消していった。16 世紀になるとモスクワ以外のいくつかの都市（ノヴゴロド、コロムナなど）にその存在が知られるにすぎない⁴⁶⁾。また 16 世紀後半のモスクワには、ラシャを商う店舗街 *суконный ряд* があり、世紀末には特権商人団体の一つスコンナヤ・ソトニヤが成立するに至っているが、これがわずかにスコニキの名残りを留めるものであった。

3. 16 世紀末—17 世紀のゴスチ

ゴスチが明確な法的身分を獲得し、モスクワ商人階級の最頂点に立って、重要な役割を果たすようになったのは、この時期になってからである。それゆえ研究者の多くは、ゴスチをただちに 17 世紀モスクワの特権的大商人と理解するにいたっている⁴⁷⁾。

17 世紀のモスクワ上層商人は、法的に三つのグループにまとめられていた。ゴスチ、ゴスチンナヤ・ソトニヤ *гостинная сотня*、スコンナヤ・ソトニヤ *суконная сотня* である。モスクワ上層商人がいくつかの階層に分化しつつあることを示す最初の徴候は、16 世紀中葉にみられる。すでに 1550 年の「法典」*Судебник*、第 26 条「名誉毀損について」の項では、都市民は「大ゴスチ」、商人 *торговые люди*、ボサード民並びにすべての中流層 *все средние*、「都市下層民 *черный городской человек молодчий*」の三カテゴリーに分けられ、それぞれの名誉毀損に対し、50 ルーブリ、5 ルーブリ、1 ルーブリの罰金が課されている⁴⁸⁾。「大ゴスチ」の存在は中小ゴスチの存在をも暗示している。それは 1589 年の「法典」でより明瞭になる。ここでは、「大ゴスチ」に対する名誉毀損の際の罰金規定（50 ルーブリ）に続いて、「中ゴスチ」と「小ゴスチ」に対する罰金額（20 ルーブリ）

44) モスクワの西方との結びつきについては、さしあたり、Хорошкевич, А. Л., “Договоры Полоцка 1405–1406 гг. как источник по истории его внешней торговли и торговой политики.”, в; *Археологический ежегодник* за 1962 г., М. 1963, стр. 79–87 をみよ。

45) Knackstedt, *Moskau*, S. 120.

46) Флоря, *Купечество*, стр. 149; Пронштейн, *Великий Новгород*, стр. 121 に掲げられた表によるとノヴゴロドにスコニキが 42 名いたことが知られる。（ちなみにスロジャーネが 13 名他に *Сурожник* が 1 名、またゴスチは 4 名）、さらに同書, стр. 142–143.

47) たとえば Baron, *Gosti*. p. 1. またブソコーヴィチは 16 世紀後半に初めてゴスチが特別の意味をもつに至ったとし、それ以前にはゴスチは「単に商人をさす一般的用語」にすぎなかったと記している。Bushkovitch, *Merchants of Moscow*. p. 17.

48) *Памятники русского права* (以下 *ПРП*), вып. 4. под редакцией Л. В. Черепнина, М. 1956, стр. 238, 278–279. それぞれ妻については 2 倍となっている。参考までに農民の場合は 1 ルーブリ, дети боярские の場合は、各自の俸給に応じて、すなわち 3–5 ルーブリである。

リと12ルーブリ)も記されている⁴⁹⁾。かくて16世紀末のモスクワには、すでに大中小の三種のゴスチの存在していたことが知られるのである。これらのゴスチと17世紀のゴスチ、ゴスチンナヤ、スコナヤ両ソトニャとの間の関係は明らかでない⁵⁰⁾。だがいずれにせよ、16世紀にみられた上層商人の分解傾向が、16世紀末以降にゴスチ、ゴスチンナヤ、スコナヤ両ソトニャという明確な特権商人団体に発展していったことは疑いない⁵¹⁾。

この時期のゴスチは、ツァーリの特許状 *жалованная грамота* を得て初めてそれと認められた。それゆえ、それは公式的な身分であった。一般的には最も豊かな商人がゴスチに任命されたが、必ずしもそうとは限らなかった⁵²⁾。ゴスチは通常ゴスチンナヤ・ソトニャのメンバーから抜擢されたが、時にはゴスチの手代が、その有能さを買われて、ゴスチに任命された例もあった⁵³⁾。アレクセイ・ミハイロヴィチ治世のロシアに関する貴重な記述を残したГ.コトシーヒンは、ゴスチが二つのソトニャとポサード民から選抜された、と記しているが⁵⁴⁾、農民出身のゴスチも珍らしくなかった⁵⁵⁾。

ゴスチ身分は世襲ではなかった。稀に三代ないし四代続いた例があるが、多くは一代限りであった。17世紀のゴスチについて注目すべき業績をあげている S. H. バロンの調査によると、一代以上続いたのは、ゴスチを生んだ商家全体の四分の一(79家のうち21家)、二代以上続いたのは全部で5家にすぎなかった⁵⁶⁾。

49) Там же, стр. 419.

50) 両ソトニャが何時成立したかは不明である。ただゴスチンナヤ・ソトニャに関しては1580年代中葉にはその存在が確認されている。см, Флоря, Купечество, стр. 157.

51) この点はおそらく1649年の『法令典』*Уложение*, 第10章第94条における、名誉毀損の際の罰金規定からも裏づけられる。すなわち、ここでゴスチに対する名誉毀損については罰金50ルーブリ、ゴスチンナヤ・ソトニャのメンバーについては、10~20ルーブリ、スコナヤ・ソトニャのメンバーについては5~15ルーブリと定められている。これは1589年法典の大・中・小ゴスチの罰金規定にほぼ対応するのである。ПРП. вып. 6, стр. 90.

16世紀のモスクワ上層商人のなかには、もう一つ「スモリニャーネ」*Смольняне* と称するグループがいた。かつてクリュチェーフスキーはこのグループをスモレンスク経由で西ルーシ地方ヤルトワと交易を行ったモスクワ商人と考えたが(Ключевский, *Сочинения*, т. VIII, стр. 42), バフルーシンは、これが1514年にスモレンスクからモスクワへ強制的に移住せしめられた商人グループであることを論証している。(Бахрушин, *Научные труды*, т. I, стр. 162-163.) 彼らがいかなる組織を有していたかは不明である。彼らは1566年のゼームスキー・サポールに12人のゴスチ、41人のモスクワ商人と並んで、特別のグループとして参加しており(22名)、ここからゴスチに次ぐ特権的グループであったことが分る。16世紀のモスクワにはノヴゴロドヤブスコフ、ウスチューグ等からも多くの商人が移住してきており、何故スモレンスク出身者のみが特別のグループを結成していたのかは不明である。いずれにせよ、このグループの寿命は長くはなく、その後急速に消滅したように見える。彼らと上記の大中小ゴスチとの関連も定かでない。

52) 例外の最大のものはストローガノフ家の商人である。彼らは16世紀以降のロシアで疑いもなく最大級の商人・企業家であったが(1649年の『法令典』第10章第94条(上記, 注51参照)では彼らに対する名誉毀損の場合100ルーブリの罰金が課されている), *именитые люди* とよばれて、ゴスチとは区別されていた。ストローガノフ家については、さしあたり Введенский, А. А., *Дом Строгоановых в XVI-XVII веках*, М. 1962 を参照。

53) たとえば Бахрушин, *Научные труды*, т. II, стр. 137 сл.

54) Котошихин, Г., *О России в царствование Алексея Михайловича*, изд. 4-ое. СПб. 1906 (=Slavistic Printings and Reprintings, 126, Mouton 1969), стр. 139.

55) たとえば Бахрушин の“*Торговые крестьяне*”論文をみよ。

56) Baron, *Gosti*, pp. 8-9, 29. バロンはこのように、ロシアにおける商人資本の不安定性=非継続性を主張したが、このような立場はソヴェトの研究者のうちにも認められる。たとえば封建制から資

バロンは同様に、1623～25年から1710年までの、およそ10年間隔の八時点におけるゴスチ名表を作成している。これによって我々は17世紀のゴスチ数のみならず、どのような人物や家系がゴスチとなっていたのかを知ることができる。バロンによれば、上記期間中に史料に現われるゴスチ数は、全部で132名、各時点毎では、1623～25年—22名、1634年—17名、1646～50年—27名、1662年頃—30名、1675年頃—39名、1685～87年—40名、1696～99年—41名、1710年—31名である⁵⁷⁾。

ゴスチは一般に資産の規模や取引額において、ゴスチンナヤ・ソトニャのメンバーに優っていた。だがなかには後者に明らかに劣るゴスチもいた。ゴスチ内部に相当の個人差が存在したわけである⁵⁸⁾。コトシーヒンはゴスチの年間取引額を2万～10万ルーブリと見積っているが⁵⁹⁾、バロンも1632～34年のゴスチの資産に対する課税評価額のリストを作成して、最大規模のゴスチは最小規模のゴスチの29倍と算出している。この較差は1710年時点においてはますます拡大し、両者の比は125:1になっている。ゴスチといっても大小様々であったことになる⁶⁰⁾。

ゴスチは数々の特権を与えられていた。その大部分は、彼がゴスチに任命されたときに与えられる特許状に列挙されていた⁶¹⁾。頭初、ゴスチに認められた特権はそれほど広範囲にわたるものではなかった。現存する最初の特許状は、1598年のノヴゴロド商人イヴァン・ソスコフに与えられたものであるが⁶²⁾、特権として認められたのは次の三点であった。①兵士への宿舎提供義務の免除（ただしツァーリ直々の行軍の場合を除く）、②あらゆる種類の飲料（酒類）の所蔵権（ただし販売してはならない）、③裁判特権、すなわち彼と

本制への移行論争のあった際、Н. И. Павленкоらは「当時の商人らの商産業会社の大部分は一代、ないし高々二代の間に発展をとげそして没落した」と考えている。このような考えの論拠となったのは、パンクラチエフ、フィラーチエフ、ジョーリン、ボソイ、レヴァーキン、カルムィコフといったゴスチやそれと並ぶ商人家系——「17世紀のきらめくばかりの稼ぎ頭たち」——が18世紀には「歴史の活動舞台から消えていった」という事実であった。см. *Переход от феодализма к капитализму в России: Материалы всесоюзной дискуссии*. М. 1969, стр. 29-30, 367-368. もちろんこれに対する反論がないわけではない。とくに最近の Bushkovitch, *Merchants of Moscow*, pp. 15-22 は、17世紀という時点でロシア・ゴスチの安定度は他のヨーロッパ諸国の商人資本のそれと比較して、とくに劣るものではないことを主張している。また Демкин. А. Б. “К вопросу о преемственности торговых капиталов XVII в. (по материалам г. Торжка)” в кн.: *Промышленность и торговля в России XVII-XVIII вв.* Сб. статей, М. 1983, стр. 168-174 は、ゴスチやそれに次ぐ一部の大商人資本だけでなく、一般の商人家系をも考慮に入れるべきことを説き、トルジョク市の場合18世紀の商人階級の主要部分は17世紀からすでに卸商人として活動していたことを主張している。さらに同著者の“К вопросу о преемственности торговых капиталов второй половины XVII-начала XVIII века (по материалам верхневолжских городов)”, *Ист. СССР*, 1982, №. 1, стр. 135-141. もヴォルガ上流域諸都市（カシン、オスタシコフ、ルジェフ、スタリーツァ、トヴェーリ、トルジョク）を例に同様の結論に達している。

57) Baron, Gosti, p. 22 f.

58) *ibid* pp. 10-12.

59) Котошихин, *О России*, стр. 139.

60) Baron, Gosti. pp. 10-11.

61) Baron, Gosti, p. 17. によると9通が現存しているという。(うちロシア人に与えられたのは5通。本稿では *АИ*, *ДАИ*, *ПСЗР* の三史料集を利用しただけであるが、ロシア人ゴスチに関して6通検討した。下記、注62, 63, 65, 66, 67を参照)

62) *ДАИ*, т. I. №. 147, стр. 250.

彼の子、甥らは商用でどこに行こうとも、その代官らの裁判には服さず、ツァーリの裁判にのみ服す。

ところがそれから50年後の1648年に、ゴスチとゴスチンナヤ・ソトニャのメンバー(торговые люди とよばれている)に与えられた特許状では⁶³⁾、特権の範囲はさらに拡大している。まず1598年に認められた三特権は、ほぼそのままの形で1648年の特許状にもみえる。ただ裁判特権に関しては、ゴスチとその子、甥に加えて、使用人 люди にも範囲が拡大されている。また、訴訟に際して、ゴスチらには十字架への接吻(と宣誓)を行わずに、代理人を立てる権利が新たに認められている。新たに認められたのは次のものである。①ポサード民に課されている公租^{チヤグロ}、その他の諸税、諸業務(道路の木材舗装や公共建築物の建造など)の免除、②自宅、風呂場で火を自由に使う権利⁶⁴⁾、③駅通用馬匹・馬車の提供義務の免除、④商用での国内通行に際しての関税・通行税の免除。

以上の新たな諸特権が、この時に初めて現れたと考えることはできない。1648年の特許状は以前の諸特権を確認するという形をとっているからである。だが、1598年の特許状と比較すれば、その充実ぶりは明らかである。1648年の特許状は、最後に、ゴスチらに対する名誉毀損を厳しく戒め——「以前の勅令どおりの」罰金、おそらくは1589年の法典にあったと同様の、50ルーブリの罰金を課している——、さらにこの文書そのものを尊重しない者に対し、ツァーリの失寵をもって警告している⁶⁵⁾。

続いて、1679年にフォードル帝がゴスチ、ニキーフォル・ヴェネヴィートフに与えた特許状⁶⁶⁾をみてみよう。1648年の特許状にみられた特権は、すべてここにも含まれている。ただ各項目とも、内容がわずかず豊かになっている。たとえば、アルコール飲料に関しては、「モスクワと出張先の町々で」と所蔵の認められる範囲が拡大されており、火気の使用に関しては、「夏でも……モスクワと諸都市において」と明確にされている。まったく新たな項目はおそらく、外国への出国を認めた箇所であろう。すなわち、ヴェネヴィートフは、ツァーリの命があれば、禁制品 заповедные товары を除くあらゆる商品を携えて、ロシアと友好関係にある外国へ行くことを認められたのである。

だが1679年の特許状の重要性は、さらに次の点にもあった。すなわち、ヴェネヴィートフは、ここでも国内——とくにヴォルガ川上・下流域地方、カスピ海方面、シベリアなどが明示されている——の自由通行権を保証されているが、彼が商用で地方にあるときに、国の地方機関によって勤務を強要されることのないよう、二度にわたって特別の指示がなされている。それは彼がツァーリに直接勤務する者だからである。特許状には「というのも、われらは……彼に……われら大君の勤務を果たすように……命じたからである」と記されている。ここにはゴスチの勤務人身分的な性格が端的に表現されている⁶⁷⁾。

63) ДАИ, т. III. №. 44, стр. 150-151.

64) これはおそらくは火災予防上、一般には夏期に火気の利用が禁止されることのあることと関係がある。

65) 1658年にゴスチに任命されたアフナーシー・フェドートフへの恵与状もほぼ同様の内容である。(ДАИ, т. IV, №. 56, стр. 149-150.)

66) АИ, т. V, №. 43, стр. 65-69.

67) ゴスチ、ミハイル・グーリエフに与えられた同年の恵与状も、ほぼ同様の内容をもっている。Полное собрание законов Российской Империи (以下 ПСЗР と略記), Серия I. т. II, №. 782, стр.

ゴスチの特権を構成するもう一つの重要な要素に土地所有権がある。この時代に土地所有権を認められたのは皇室や諸公・貴族、修道院・教会を除けば、いわゆる「勤務人階級」*служилый класс* だけであった。ところが、本来ポサード民であったゴスチにも、17世紀後半から土地購入権が認められていく⁶⁸⁾。Ю. ゴチエーによれば、ゴスチの土地所有は極めて稀で、首都に近い地方では制限されてさえいたというが、それにもかかわらず、彼らにもこの権利が認められるようになったことは、彼らがすでにポサード民ではなくなっていることを示すものとみてよい⁶⁹⁾。

ゴスチは以上の如く、広範な特権を与えられていた。だが彼らはそれを無条件で認められていたわけではない。すでに示されたように、あくまでもツァーリに対する勤務の代償として認められていたのである。それゆえ、時代を追っての特権の拡大は、当然のことながら勤務義務の拡大をも意味していた。そこで次に、彼らに要求されていた勤務の種類についてみよう。

ゴスチが果たすべき勤務の種類と内容は、「訓令」*наказ* とよばれる文書に詳細に記されている⁷⁰⁾。それをまとめると次のようになる。第一に、彼らは主な都市（モスクワ、アルハンゲリスク、アストラハン、ノヴゴロド、プスコフ等）における関税徴収業務を監督・遂行した。アルハンゲリスクでは、ゴスチはゴスチンナヤ・ソトニャのメンバーから選任された数名の関税頭 *таможенные головы* とスコンナヤ・ソトニャのメンバーや地元の有権者からなる役人 *целовальники*（宣誓人）の助力をえて、用務を遂行した。モスクワではゴスチは関税総局 *Большая таможня* を統轄した。これらの用務に従事するゴスチは、頭初政府が直接選任していたが、後、少くとも1667年には、ゴスチらがこれを自主的に決定し、分担しあうことを認めた⁷¹⁾。任期は通常一年であった。ゴスチは関税以外にも、たとえば臨時税として賦課されたピャーチャーナ税や、上層商人に課される他の諸税の査定と徴収をも委ねられた。アルハンゲリスクに派遣されたゴスチは、さらに外国商品をつァーリのために買いつけ、あるいはツァーリの国庫に属す物品を外国人に売却し、

221-224. また1681年にカザンの商人 Н. А. Третьяков に与えられた恵与状 (*ДАИ*, т. VIII. №. 103, стр. 328-330) をも参照。

68) たとえば *ПСЗР*, Серия I. т. I. №. 390, стр. 616 (1666年の例); Там же, т. II. №. 767, стр. 210-211 (1679年の例), また、いわゆる1649年の『法令典』第17章(「世襲領地について」)第45条には、政府から主なき封地を購入した者たちのなかにゴスチも入っていたことが知られる。см. *ПРП*. вып. 6, стр. 258-259. ゴスチの土地所有そのものの例は、すでに17世紀初頭から知られている。см. П. П. Смирнов, *Посадские люди и их классовая борьба до середины XVII века*, т. I. М.-Л. 1947, стр. 316.

69) Готье, Ю., *Замосковский край в XVII веке*, М. 1937, стр. 289-290.

70) たとえば, *ДАИ*, т. III. №. 116, стр. 405-438. (ドヴィナ地方における関税, 酒税徴収に関し, ゴスチ, イヴァン・パンクラーティエフに出された指令, 1654年); *ПСЗР*, Серия I. т. II. №. 873, стр. 320-325 (モスクワ関税総局への指令, 1681年); Там же, т. III. №. 1514, стр. 204-205. (シベリア庁への黒貂の販売に関する指令, 1695年); Там же, т. III. №. 1641, стр. 459-468. (ゴスチ, セルゲイ・ラバズノイへの, モスクワ関税総局における徴収業務に関する指令, 1698年); Там же, т. III. №. 1642, стр. 468-473. (ゴスチ, キリル・ラバズノイへの, 酒類の販売に関する指令, 1698年)

71) これについては, Богоявленский, С., "Распределение между гостями царских служб в 1675 г.", в: *Чтения в Императорском обществе истории и древностей российских*, М. 1913, кн. 3, отд. 4, стр. 44-47. をみよ。

その代価で帝国銀貨 (Reichsthaler ないし Joachimsthaler) を買いつけるなど、ツァーリの商業代理人としての用務をも同時に果たした。彼は勤務を首尾よく達成した暁には、ツァーリの寵を得ることができたが、不首尾に終わった場合には、寵を失ったのみならず、自ら損失を補填しなければならなかった。

第二に、ゴスチは国庫の運営に深く関与した。とくに彼らは国家の独占であった酒類の販売行政を指導した。彼らは火酒の醸造、製品の受渡し、居酒屋からの料金の受領等の業務を監督した。また彼らはシベリア庁内の重要な部門である黒貂局 *собольные казны* の業務をも遂行した。彼らはここで、役人がシベリアで徴収した毛皮類 (ヤサークとして、シベリア毛皮商人からの十分の一税として集められたもの、また役人自身が購入したもの) の受入れ、評価、保管、代金支払い等を行った。

第三に、ゴスチはロシア第一の商人といわれたツァーリの代理人として活動した。ツァーリは外国商人の持参する商品に対する優先購入権を主張し、これによって安価に得られた数々の貴重品を、自ら消費・使用するとどまらず、国の内外で転売し、莫大な利益を得たが、こうした実務はほとんどゴスチが代行した。またツァーリは多くの商品 (穀物、金・銀、武器、黒貂、絹、キャビア等々) を禁製品に指定し、一般にはその売買を禁じ、事実上国家の独占としたが、これを捌くのはゴスチであった⁷²⁾。ゴスチはさらに、ソリ・カムスカヤなどで国営の製塩所を請負うなど広く活躍した。彼らはこれらの業務を自己の責任で請負い、欠損が出た場合にはそれを補填した。

ゴスチは以上の他にも、貨幣局 *денежный двор* において貨幣行政を指揮し、外国商人との取引や交渉に参加し、政府の財政政策上の諮問に応じ、外国使節のレセプション、ツァーリの戴冠式や結婚式等に着飾って参列した⁷³⁾。

以上の如き勤務がゴスチにとって何を意味したのか、それは彼らの自由な商業活動を妨げるほどに重荷であったかについては、議論が分れている。小稿ではこの問題を検討することはできないが、従来、ツァーリのための勤務はゴスチにとって極めて厄介な重荷であったことが強調されてきたこと⁷⁴⁾、これに対して最近アメリカ合衆国の P. ブシコヴィチらによってなされた反論は、必ずしも説得的でないことを指摘しておきたい⁷⁵⁾。

72) ツァーリの商業活動及びゴスチの役割については、さしあたり、Кулишер, И. М. *Очерк истории русской торговли*, Пг. 1923, стр. 157-161; Фехнер, *Торговля*, стр. 107-111. をみよ。また Bushkovitch, *Merchants of Moscow*, 第9章は国家のアルハンゲリクス貿易への参加の度合を調べている。

73) 宮廷や総主教庁での様々な宴会へのゴスチの出席の例についてはさしあたり、Смирнов, *Посадские люди*, т. I. стр. 359-361. を参照。

74) たとえばバフルーシンは次のように述べている。「(モスクワ諸ツァーリの) 粗野な重商主義は商人階級を地主貴族 (階級) のために最も無恥な方法で利用するという純粋に封建的方式と実によく合致していた。国庫は大商業ブルジョアジーの代表者から、可能な限りのすべてを吸いとり、その後、『完全に容落させたあげく』、彼らをしぼり取られたレモンの如くに、放り出した。国庫は決して将来のことを考えず、またこのような近視眼的な政策の結果を明瞭に理解しようとしなかった。」(*Научные труды*, т. II. стр. 255) また Baron. Gosti 論文もこのような立場に立っている (彼がその後立場を若干修正させたことについては注1をみよ)。Leitsch, “Stadtbevölkerung” 論文 (とくに SS. 240-243) も、また Kaufmann-Rochard, *Origines d'une bourgeoisie Russe*, 第4章とくに pp. 85-89 も同様である。

75) Bushkovitch, *Merchants of Moscow*, pp. 15-22, 23-24, 151-173. 本書は、全体としてロシア商

II. 変質とその原因および意味

さて、以上にゴスチとは何かについて、その時代ごとの展開過程を大よそ示しえたと思う。そこでも示されたように、14-15世紀のゴスチと17世紀のゴスチとの間には、いくつかの相違点があった。それは次の三点にまとめられよう。

第一は、両ゴスチ間の身分的相違である。14-15世紀のゴスチが、身分的にはポサード民と一体をなすものであったのに対し、17世紀のゴスチは、ポサード民からは明確に区別された、勤務人階級に近い存在となっていた。彼らがツァーリの特許状を得て初めてゴスチ身分となり得たという事実も、ポサード民一般とは異なる彼らの特別の身分を示している。

第二は、両ゴスチのもつ特権及びそれと密接に関わる勤務義務面での相違である。これについてはもはや繰り返す必要はないであろう。

第三の相違点は、17世紀のゴスチがモスクワにのみ特有な存在となっていたことである。これについては説明を要する。14-15世紀にモスクワ以外の諸都市に、どれだけのゴスチが存在したのかは不明である。だがそれが少なくとも、トヴェーリ、ノヴゴロド、プスコフ、ニジニ・ノヴゴロド等に存在したことは確認できる⁷⁶⁾。16世紀になると、ゴスチの遍在状況は一層明確になる。B. H. フロリャによると、16世紀中葉のロシアには、住民が庶民 *черные люди* のみからなる都市も数多く存在したが（トロペツ⁷⁷⁾、セールプ

人を否定的に理解しようとする通説に対する反論となっている。確かにブシコーヴィチの見解にはいくつかの注目すべき点がある。たとえば、ゴスチが想像以上に安定した存在であったこと、またロシア都市や商手工業の発展を西欧とよりは、むしろ東欧（ポーランド、ボヘミア、ハンガリー）と比較すべきこと等の指摘である。（この点については、さらに Bushkovitch. "Towns, trade and artisans in seventeenth century Russia: The view from Eastern Europe". *FOG*. Bd. 27 (1980). SS. 215-232. をも参照）だがバロンがその書評（編集者への書簡）において適確に示したように、ブシコーヴィチが批判しようとした「通説」は、彼が恣意的に再構成した「通説」にすぎず、それゆえ、彼の主張の重要な部分は何ら新たな提言となっていない。たとえば上層商人の活発な企業活動については、バフルーシンらソヴェト史家はもとより、ドヴナル・ザポリスキーもすでに指摘したところである。またこれまでの研究者は、しばしば国家の否定的役割を誇張してきたが、彼らとしてそれを「純粹に否定的」としてきたわけではない。結局、過去の史家が私的商業活動に対する障害を誇張し、モスクワ商人の業績を過少評価してきたのと丁度逆のことをブシコーヴィチは行なったようにみえる。

バロンは以上のようにブシコーヴィチを批判したが、ブシコーヴィチの著書の有益な点を正当に評価することを忘れていないことにも注意を喚起しておきたい。というのもブシコーヴィチの著書には R. Hellie の極めて厳しい批判（というよりは全面的否認——バロンはこれを学問の発達に有害な「野蛮な攻撃」と評している）があるからである。Hellie はブシコーヴィチが非常に多くの誤りを犯していることを指摘し、彼の研究そのものを否認しているのである。本稿の筆者は、上述の如く、ブシコーヴィチの研究が有益な視点を提唱するものと評価している。（Hellie の書評—*Slavic Review*, (以下 SR) v. 40, No. 2 (1981), pp. 280-282; Baron の書評—SR. v. 40, No. 4 (1981) pp. 693-695. さらにブシコーヴィチ自身の以上に対する反論—SR. v. 40, No. 4, pp. 695-696. および H. Fisher の書評—*Russian Review*. v. 40, No. 2 (1981). pp. 181-182. をも参照）。

76) *Сборник Императорскаго Русскаго Историческаго Общества*, т. XXXV. стр. 9, 128, 132, さらに см. Сыроечковский, стр. 22, 42-44.

77) トロペツ市の住民構成については、吉田俊則「ロシア都市自治に関する一試論—16・17世紀トロペツ市を素材として」『北大史学』第22号（1982年）第2節を参照のこと。

ゴスチ考

ホフなど)、すべてがそうであったとは考えるべきではない。各地に残る土地台帳等から、少くともコロームナ、ムーロム、ノヴゴロド、プスコフ、トヴェーリ、カザンにゴスチが存在したことが知られているのみならず、ヴォーログダ、リャザン、ヴェリーキエ・ルーキ、ドミートロフにも存在したことが推定できる。しかもこのうち、ノヴゴロドには1546年時点で234のゴスチ戸数が記録されており、プスコフに関しては、20年代に、「モスクワその他10都市から移住してきたゴスチ300家族」の存在が伝えられている。さらにコロームナでは1577-78年に5戸のゴスチ、13戸のスコンニキ、カザンに関しては、1565-66年に20戸のゴスチ、ムーロムでは同年に8戸のゴスチの存在したことが知られている⁷⁸⁾。

これに対し16世紀末-17世紀のゴスチのモスクワへの集中は顕著である。この時期、地方都市における特権商人層は事実上存在を止めている⁷⁹⁾。このことはモスクワ以外の都市のポサード共同体が、この時期に租税負担民を唯一の構成要素とする、単一身分の組織に変質したことを示している。もちろん例外はあり、17世紀初頭のプスコフには数名のゴスチが存在していたことが伝えられている。また個々の事例は17世紀を通じて知られている⁸⁰⁾。だが16世紀末以降のゴスチのモスクワへの集中は疑いない。以下にみるようにそれは政府が意識的に目ざした方向でもあったのである。

さて、以上三点に要約された相違点は、単に、14-15世紀のゴスチが時とともに成長して、17世紀のゴスチとなっていったことを示しているわけではない。17世紀のゴスチが、14-15世紀のそれに比べて、経済的、社会的にはるかに成長した存在となっていたことは疑いない。だがそれだけではなかった。彼らが以前のゴスチの単なる自立的成長の産物ではなかったことを示すのは、そう難かしいことではない。上にあげた相違点はすべて、17世紀ゴスチの存在の上にツァーリ政府の手が及んでいたことを明白に物語っているからである。それは、いわばツァーリ政府によって意図的に創り出された人工的な産物であった。

ではゴスチがそのような存在に変質ないし転化したのは何時で、それはいかなる原因によっていたのであろうか。

14-15世紀ゴスチと17世紀ゴスチの間に本質的相違のあることに気付いた研究者は少くない。むしろ、M. H. ディヤコノフやクリュチェーフスキーのように⁸¹⁾、両者を区別せずに扱う研究者はほとんど姿を消したといってもよい。だがこの変質の原因を適確に指摘しえた研究者は意外に少いように筆者には思われる。たとえばシロエチコーフスキーは双方の本質的差異を強調しながら、両者が封建社会の異なった発展段階にあったことを指摘するに止まっている⁸²⁾。こうしたなかで一步踏みこんで、具体的な原因を指摘したのはB. H. フロリャである。彼は、ゴスチの性格変化が何よりも *свод* とよばれる現象の

78) Флоря, Купечество, стр. 150.

79) Там же, стр. 155.

80) Бахрушин, *Научные труды*, т. I. стр. 227 сл.; Baron, *Gosti*, p. 7; Bushkovitch, *Merchants of Moscow*, p. 17.

81) Дьяконов, *Очерки общественного строя*, стр. 235 сл.; Ключевский, *Сочинения*, т. VI. стр. 150.

82) Сыроечковский, стр. 31, 37-39.

後に起こったことを指摘する⁸³⁾。свод とは、モスクワ大公が、ロシア領土統一の過程で併合した諸地域から、貴族や商人などをモスクワないし他の地域へ強制的に移住させたことをさす語で、вывод と言い表わすこともあった。

歴史上、集団的強制移住の例は広く知られており、モスクワ国家のみの専売特許ではない⁸⁴⁾。だがイヴァン三世以来、それはモスクワ政府の相当重要な政策として定着したようにみえる。たとえば、ノヴゴロド併合後間もない1487年、50名の「最良のゴスチたち」がウラジーミルへ、翌年にも「多くのノヴゴロド商人」がモスクワ大公国の諸都市へと移住させられた⁸⁵⁾。また1504年には、ウラジーミルから11名のノヴゴロド商人が、ペレヤスラヴリからも5名が、モスクワへ再移住せしめられている。このような例は次のヴァシーリー三世治世にも観察され、イヴァン四世治世に最大規模に達した⁸⁶⁾。

ところで、フロリャはイヴァン三世以来の свод を次の三種に分類している。第一は、地方都市からモスクワへの、とくに手工業者の個別的強制移住、第二は、15世紀末-16世紀第一四半期における、西部ルーシ諸都市の富裕市民層の強制移住、第三は、16世紀後半、すなわちイヴァン四世治世の強制移住である。このうち第三のイヴァン四世治世の強制移住は、前二者に比し、次のような特徴をもつ。まずそれは、もっぱらモスクワへの移住であった。次に、モスクワへの強制移住に対応する首都からの地方都市への移住はみられなかった⁸⁷⁾。

イヴァン四世治世の強制移住がこのような特徴を示すにいたったのには、もちろんそれなりの理由がある。フロリャはイヴァン四世期の、とくに1571年以降の強制移住に注目し、それらをとくに1571年5月の、クリミア・タタール軍のモスクワ襲撃及びモスクワ炎上と関連させている。彼によれば、この時にモスクワが蒙った人的被害を埋め合わせるの

83) Флоря, Купечество, стр. 153 сл.

84) たとえば Fischer, H., "Die Siedlungsverlegung im Zeitalter der Stadtbildung. Unter besonderer Berücksichtigung des österreichischen Raumes", in: *Wiener Rechtshistorische Studien* 1, 1952. またビザンツにおける伝統についてはたとえば, Ostrogorsky, G., *Geschichte des byzantinischen Staates*, 2. Aufl., München 1952, SS. 95, 106 f., 135 u. a.; Charanis, P. "The Transfer of population as a policy in the Byzantine Empire" in: *Comparative Studies in Society and History* 3, 1961. p. 140-154 を参照。ビザンツ的伝統のカール大帝のザクセン政策への影響について指摘した Ohnsorge, W. "Die Auswirkung der byzantinischen staatlichen Siedlungsmethoden auf die Sachsenpolitik Karls des Großen" in: *Niedersächsische Jahrbücher*, Bd. 39 (1967), SS. 86-102 をみよ。またロシア(と東欧)の例を概観したものに, Rhode, G. "Zwangsumsiedlungen in Osteuropa vor der Oktoberrevolution", in: *Geschichtliche Landeskunde und Universalgeschichte*, Festgabe f. H. Aubin. Hamburg 1951, SS. 163-184 がある。またとくにモスクワ国家における вывод 概念の特徴をリトワ国家のそれなどと比較した Хорошкевич, А. Л. "Право «вывода» и власть «государя»", в: *Россия на путях централизации*, Сб. статей, М. 1982, стр. 36-41 をも参照。

85) см. Бахрушин, *Научные труды*, т. I. стр. 162; *История Москвы в шести томах*, т. I. М. 1952, стр. 150; Knackstedt, *Moskau*, S. 126, とくにモスクワによるノヴゴロド併合後の свод については, Бернадский, Б. Н. *Новгород и новгородская земля в XV веке*, М.-Л. 1961, стр. 337-338; Янин, В. Л. *Новгородские посадники*, М. 1962, стр. 325-326; Fennell, J. L. I., *Ivan the Great of Moscow*, London, 1963, pp. 58-60 をみよ。

86) Бахрушин, *Научные труды*, т. I. стр. 162-165; *История Москвы*, т. I. стр. 150-153.

87) Флоря, Купечество, стр. 153.

が、これらの大規模な強制移住の目的であったという。フロリャの仮説には若干の難点がある。とくに彼が1571年以前のイヴァン四世政府による強制移住を無視しているのは、理解に苦しむ。だが彼の着想は十分に考慮に値する。彼は明確に述べていないが、イヴァン四世期の、とくにクリミア・タタール襲撃以降の強制移住は、それ以前の強制移住とは異なる目的をもっていったようにみえるからである。イヴァン三世が15世紀末に、併合したばかりのノヴゴロドから多くの人々をモスクワその他に移住させ、代りの者たちをモスクワからノヴゴロドに送りこんだとき、彼がノヴゴロド地方の治安のことをも念頭に入れていたことは明らかである。彼は新たに併合した地域の有力者（貴族、大商人等）をその地から切り離し、モスクワの政府に忠実な分子を送りこむことによって、その後予想される反モスクワ的運動の芽をつみとったのであった⁸⁸⁾。ところがイヴァン雷帝治世のある時点以降は、フロリャが示したように、強制移住はもっぱらモスクワに、商人を中心とする富裕市民層を集めることを目的としていた。

さて、フロリャによれば、1571年以降の一連の強制移住によって、ロシア諸都市の市民身分に構成上の大変化が起こった⁸⁹⁾。まず地方都市における特権的市民層が事実上存在を止めてしまった。たとえばムーロムでは、1573-74年に、かつて八軒を数えたゴスチ戸数のうち六軒は空屋となり、残りの二軒もゴスチではなく、その使用人が住むだけになっていた⁹⁰⁾。またコロムナでは1577-78年に、クレムリ内のスコニキの館が下級貴族に分配されている。明らかにスコニキが居なくなっていたからである。同じ時期、コロムナのポサードにはゴスチの館が二戸、スコニキの館が一戸記録されているだけである。ノヴゴロドでは1571年、商業地区からモスクワへ60のゴスチ家族が強制的に移住させられている。80年代初頭の土地台帳に、かつてここにゴスチの館が59軒あった、と記されているところから、ノヴゴロドのゴスチはこの時ほとんど完全にモスクワへ移住せしめられた、と考えられる。他方、政府は、既述の如く、これらの都市にモスクワの特権的商人を送り込もうとはしなかった。かくて80年代中葉以降、地方都市に特権市民層は消滅し、それと同時に地方都市のポサード共同体は、後の史料からよく知られているような、単一の租税負担民からなる均質的な組織となってしまった。

地方都市の構成におけるこのような変化と時を同じくして、モスクワの特権市民層の性格にもすでに示した如き変化が起った。もっともフロリャは、性格変化の第一として、ゴスチ数の減少を挙げているが⁹¹⁾、これは事実と反する。すでに16世紀中葉のモスクワにおけるゴスチ数が他都市に比し少なくなっていたことが知られているだけでなく⁹²⁾、16

88) Платонов, С. Ф., *Иван Грозный*, Петербург 1923, стр. 120-121. ただし Носов, Н. Е. "Русский город и русское купечество в XVI столетий, (К постановке вопроса)" в кн.: *Исследования по социально-политической истории России*. Сб. статей памяти Б. А. Романова, Л. 1971, стр. 164 は強制移住は、通常地方都市からモスクワへの一方的なものであり、モスクワから地方都市への商人の移住は例外的であったことを主張している。

89) 以下 Флоря, *Купечество*, стр. 155 сл. による。

90) ムーロムに関してはとくに Кучкин, В. А., "Материалы для истории русского города XVI в. (Выпись из писцовых книг г. Муром 1566 г. и муромская сотня 1573/74 г.)" в: *Археографический ежегодник за 1967 г.* М. 1969, стр. 298, 304, 308. をみよ。

91) Там же, 156.

92) 既述の如く(注51)1566年のゼームスキー・サポールに出席したゴスチは12名であった。当時の

世紀末以降については、ゴスチのみならず、ゴスチンナヤ、スコナヤ両ソトニャのメンバーも含めて考えるべきだと思うからである。ゴスチだけでも、フロリャの主張する如く10～20人台であったのではなく、バロンが明らかにした如く、40人を越えることもあったのであり、ゴスチンナヤ、スコナヤ両ソトニャのメンバーに至っては、フォードル帝治世にそれぞれ350人、250人であった⁹³⁾。それゆえ16世紀末以降、モスクワのゴスチ数は一見減少したように見えながらも、特権的商人層全体としてはむしろ増加したと考えるべきであろう。

変化の核心は、むしろ70年代以降にモスクワに集中せしめられたゴスチが、明確にツァーリと国家の勤務に縛られたことにあった。以前のゴスチにツァーリへの勤務義務がまったくなかったというのではない。だが彼らが関税徴収等の業務に従事せしめられていたことを告げる史料はない⁹⁴⁾。いずれにせよ、それが十分に制度化されず、負担もさほど重くなかったことは確かである。彼らは自己の本来の活動に十分に励むことができた。

これに対し、16世紀末以降のゴスチ、ゴスチンナヤ、スコナヤ両ソトニャの成員は、その特権を国家の財政機構における勤務を条件として得ていた。勤務はしばしば、商人としての本業と両立させることが困難なほどに重い、強制的義務であった。このような勤務義務の結果、かつては他の都市市民と大差のない、市民身分の一員であった特権的商人は、16世紀末以降、次のような二重の機能を果す身分へと変質した。すなわち、彼らは商業や他の産業に従事する市民として、ポサード民と共通の利害関係に立つ一方、封建国家の財政機構の一端を担う者として、ポサード民を搾取する立場に立つことになったのである。政府の意図は、言うまでもなく、後者の方向を押しすすめることにあった。彼らはモスクワの特権商人をモスクワ市民一般及び地方都市市民から切り離して、自己の手先として

モスクワ・ゴスチの総数が一部の研究者、たとえば Knackstedt, *Moskau*, S. 123. などが考えるように12名であったかどうかは疑問であるが、これを大きく越えるものでなかったことも容易に推察される。

93) ただし前者(350名)にはゴスチも含まれていた。ДИАИ, т. III. №. 47, стр. 159. см. *История Москвы*, т. I. стр. 182. スムータ後この数は減少し、17世紀を通じて16世紀末の水準に戻ることはなかったように見える。たとえば1649年には、ゴスチは13名、ゴスチンナヤ、スコナヤ両ソトニャはそれぞれ158名と116名であった。また1678年には、ゴスチとゴスチンナヤ・ソトニャが合わせて141戸、スコナヤ・ソトニャが51戸であった。ДИАИ, т. III. №. 47, стр. 159; ДИАИ, т. VIII. №. 40, стр. 121-122. さらに см. *История Москвы*, т. I. стр. 464-465.

94) Флоря, *Купечество*, стр. 158. フロリャは16世紀前半までのゴスチには財政上の勤務義務がなかったことの根拠として、関税等の徴収がこの時期には通常請負に出されていたことをあげている。だが他ならぬゴスチがこれを請負わされたことも考えられるわけで、この論拠は(結論は別だが)納得しがたい。しかも、ブシコーヴィチの研究によれば、関税(彼によれば16世紀においては、国庫にとって、都市に関しては、直接税よりも関税や酒税の方が重要であった)徴収の請負制は16世紀前半には(一部の例外を除いて)存在しなかった(それが出現するのは1549年以後で、一般化したのは1556-1570年である。その後は衰退し、宣誓人=下級役人による徴収が再び主流となった)。とすれば、フロリャの論拠はますます怪しくなる。ブシコーヴィチは、請負制が一般化した50-70年代においても、ゴスチはこれには積極的ではなかったと考えている。(それ以前には請負制は存在しなかったのであるから、ゴスチが請負わされることもなかった。それゆえブシコーヴィチの立場からしても、16世紀前半までのゴスチが財政上の勤務を強いられたことはなかったということになる。) See Bushkovitch, P. "Taxation, Tax Farming and Merchants in Sixteenth-Century Russia", *SR*. v. 37, No. 3 (1978), pp. 381-398.

利用しようとしたのである。

16世紀後半、とくにイヴァン四世のオプリーチニナ以降、ロシア農民の農奴化過程が進行したことはよく知られている⁹⁵⁾。しかしこの過程が、当時のロシア都市と都市民（より一般的に言えば非農民）をも巻き込んだ広汎なものであったことはあまり知られていない。

15世紀末に一つの明確な階級として登場した、ポサード民の運命についての大著を著わした П. П. スミルノフによると⁹⁶⁾、かつて移動の自由を認められていたポサード民から、その移動権が奪われたのは1581年秋、「禁止年」に関する最初の勅令が發布されたときである。この勅令は、それまで「ユーリの日」とは関係のなかったポサード民にも適用されたのである。また1591年にはトロペツ市の行政法が、ポサード民のポサードからの移住 **выход** を禁じている。スミルノフによれば、イヴァン四世期の「選抜会議」政府の対ポサード政策は不徹底で矛盾したものでありながらも、基本的には、都市の封建的隷属からの解放 **раскрепощение** を目指すものであったという⁹⁷⁾。それがイヴァン治世の最末期に、ポサード民の緊縛化という事態に至ったのは何故か、そこには政策の転換が行われたのではないか、という疑問がでてくるかもしれない。だがそれは政策の転換ではなかった。というも政府がポサード民を保護し、封建領主への隷属から守ったとすれば、それはポサード民の利益のためではなく、あくまでも自己の利益を考慮してのことであったからである。政府の対ポサード政策は、首尾一貫して財政的見地から行われていた。財政基盤としてのポサード共同体の保全とポサード民の当該ポサードへの緊縛は、むしろ同一メダルの表と裏の関係にあったのである。

とはいえ、何故この時期に、政府がポサード民の移動の自由を奪うに至ったのかについては、適切な説明が与えられなければならない。スミルノフは、「それは16世紀最後の数十年間の反動の条件下では自然のなりゆきであった」⁹⁸⁾と述べるのみで、この間の事情を詳らかにしていない。本稿ではこの点に立ち入ることはできないが、筆者はポサード民の緊縛が、農民の土地への緊縛と同じ原因から行われるに至ったのではないかと推察している。すなわち、農民を逃亡へと駆り立てたのと同じ原因が、都市民をもポサード共同体からの離脱に駆り立てたと考えるのである。相違点は、農民の緊縛については地主階級（とくに中小の）がそれを要求したのに対し、ポサード民の緊縛については、国家が直接的にそれを促進した点にあった。それはしかも、スミルノフが指摘するように⁹⁹⁾、ポサ

95) 農奴制の成立については鳥山成人「16世紀末ロシアにおける農民農奴化について——ソヴェト史学におけるグロコフ説」『スラヴ研究』No. 19 (1974) および石戸谷重郎氏の諸論文（『ロシア封建社会の特質』『歴史教育』第15巻12号、1967年；『15世紀末ロシアにおける農民移転をめぐる諸問題』『史学雑誌』第82編12号、1973年；『1649年法典と逃亡農民』『史学雑誌』第86編1号、1977年；『1550年法典第88条と16世紀後半ロシアの農民移転』『奈良教育大学紀要』第26巻1号（人文・社会）、1977年など）を参照。

96) Смирнов, *Посадские люди* т. I. стр. 157.

97) Там же, стр. 109 сл.

98) Там же, стр. 159.

99) Там же, стр. 156-157.

ード共同体の保全を求めるポサード民自身の要求にも合致していたのであった。

ゴスチを襲った運命も、無論、以上の如き動きと無関係ではなかった。国家は、強く意識されるに至った財政的観点から、ゴスチの隷属化を強行した。そしてとくにゴスチの性格を変える直接的契機となったのは、上記の強制移住であった。それゆえ、モスクワ政府のこの強制移住政策は、ゴスチを含む都市民一般の、またロシア諸都市とそこにおける商業活動、ひいてはロシア経済全般の発展を願ってのものではなく、あくまでも政府の直接的利益をはかる、いわば視野の狭い政策でしかなかった。最後にこの点にふれて、本稿を終えたい。

モスクワ政府の行なった強制移住策は、従来、モスクワを統一国家の首都にふさわしい都市とし、ロシアに統一的な市場を形成するための、一つの進歩的な政策と評価されてきた。このような立場をもっとも鮮明に出したのが C. B. バフルーシンである。彼は全ロシア市場形成の前提について論じた研究のなかで、次のように述べている。「モスクワは強力な配給センターとなった。それは自己の手工業者、イコン画家、武器工などの製品のみならず、ロシアの他都市及び国外から入ってくる様々な商品をも、国中に供給した。これらの商品を求めて商人たち……が首都にやってきた。モスクワはその城壁に人と資本をひきつけた。ロシア各地の経済・文化上の旧中心地から、多数の自発的・非自発的移住者が『帝都』に自己の知識、経験、才能を携えてやってきた。ロシア人民の最良の技術力を統合したモスクワは、自ら国の産業発展における指導的力となった。かくして『全ロシア市場』の成立のための基盤が準備された。それは国の当然の経済中心地であったモスクワの周囲に、漸次形成されていった。」¹⁰⁰⁾

バフルーシンの研究にあっては、「非自発的移住者」がうけたであろう損失は言うまでもなく、モスクワ政府の強制移住策がロシア諸都市の、ひいてはモスクワを含む全ロシア経済に与えた否定的、破壊的影響については一言も述べられていない。

モスクワ政府による強制移住策の否定的影響をとくに明確に指摘したのは H. E. ノーソフであった。彼はとくに、ツァーリ政府の「都市政策」がロシアの都市研究全体の発達に如何なる影響を与えたかに関心を示している。彼によれば、イヴァン四世政府はこの強制移住策によって、商業資本を最大限に活用し、国庫の必要を充足させようとしたが、それは「ロシアに形成されつつあった専制・農奴制体制に、ロシアの商人身分全体を従属させよう」とするものであった。だが、このような「商人資本の強制的中央集権化」、「政治的中央集権化のあまりに封建的な諸方式」は、この時期には——すなわち、ロシア都市に初期ブルジョア諸関係の発生をみつつあった時期には——、封建制に比してより高い生産様式であるブルジョア的様式の一層の発展を保証することにはならなかった。「このような経済政策は、14-15世紀——すなわち『ルーシの領土統一』の時期——には、正当化されたであろう。(それどころか、ロシアの経済的諸力の統合を促進すらしたであろう。)だが、(全ロシア市場の発生という)16世紀の新たな経済的条件の下では、必ずしもそうではなかった。ましてや、イヴァン雷帝のオプリーチニナ政策の『諸方式』によって実行されたのであるとすれば、なおさらそうではなかった。」かくて、ノーソフにとって、強制

100) Бахрушин, *Научные труды*, т. I. стр. 186-187.

移住政策は「16世紀前半—中葉におけるロシア経済の全般的上昇気運と、とくにその結果起こったロシア封建経済の質的変動のなかで……地方諸都市における商品貨幣関係と産業活動の発展を促進しなかったのみならず、むしろそれを妨げ……結局のところ、ロシアのブルジョアの発展の道への脱出を困難にってしまった」のである¹⁰¹⁾

17世紀のゴスチは国家に強く結びつけられていた。それは国家の強い要求の前に、自らの自立的発展のための基盤を創り出すことに失敗してしまった。これが多くの研究者の到達した結論である。もちろんこの道は不可避的なものではなかった。おそらく、16世紀60年代までは、別の可能性がロシアにも残されていたと筆者は考えている。その際、ノーソフがとくに注目するロシア北部及び北東部（Поморье と Заволжские 地方）における活発な経済活動が重視されなければならないであろう¹⁰²⁾。確かに、それ以前のロシアにおいて、西欧におけるように活発な商業活動が展開していたわけではなかった。ゴスチも不活発で、極めてプリミティブな存在に止まっていた。だがその発展はすでに始められており、然るべき条件が与えられていたならば、さらなる展開も可能であった。都市とゴスチ、そしておそらくはポサード民全体の一層の発展にとって、イヴァン四世治世、とくにオプリーチニナ以降の体制は、きわめて運命的であったように思われる。

On the *Gosti*

Takeo KURUZAWA

This paper is an attempt to comprehend the historical evolution of the *gosti*.

The *gosti* are generally considered to be the merchant elite in the 17th century, and it is also said that up to the middle of the 16th century *gost'* was only a general term for a merchant. In my opinion, by contrast, the *gosti* formed the upper stratum of the merchant class even before the 16th century, and the 17th century *gosti* should be regarded as their successors. This does not mean that there were no differences between the *gosti* before and after the 16th century, as some scholars supposed. There were of course some essential distinctions, and the two groups of *gosti* should be treated in relation to each other. The history of the *gosti* may be divided into two periods: the 14-15th and the 17th centuries, with the 16th century

101) Носов, “Русский город”, стр. 163, 167-168 (カッコは原文)

102) Там же, стр. 171 сл.; さらに Носов, Н. Е. *Становление сословно-представительных учреждений в России*, Л. 1969, стр.240-284. ノーソフが同じような立場から15, 16世紀における封建的土地所有の発展の二つの道について書いた論文 (“О двух тенденциях развития феодального землевладения в северо-восточной руси в XV-XVI вв.,” в: *V Международный конгресс экономической истории*, Ленинград, 10-14 августа 1970 г., М. 1970, стр. 1-14) も興味深い。

as a transitional stage, during which a fundamental change in the nature of the *gosti* occurred.

The paper is composed of following parts and subparts :

I What were the *gosti*?

- 1 The *gosti* in early Russian history
- 2 The *gosti* in the 14–15 th centuries— *Gosti-Surožane* and *Sukonniki*
- 3 The *gosti* from the end of the 16 th through the 17 th centuries

II The change in the nature of the *gosti* in the 16 th century : Its cause and the meaning

The first part describes the main characteristics of the *gosti* in the 14–15 th and the 17 th centuries respectively. Attention is also given to some historiographical problems, for example, whether the *Gosti-Surožane* were organized as a corporation of privileged merchants, or whether they were obliged to perform services for the Grand Prince and other princes. I am inclined to think that at this early stages the *gosti* were not yet incorporated into the service system of the Muscovite Grand Princedom. As for the *gosti* of the 17 th century, I attempt to clarify what their privileges and duties to the state were.

The second part considers the cause of the change in the nature of the *gosti* in the 16 th century. The *gosti* began to change gradually from the end of the 15 th century on ; but during the reign of Ivan the Terrible, during or after the *oprichnina*, it changed radically. The main differences between the *gosti* before and after the 16 th century are : 1) Their social status is different. The early *gosti* were included among the *posadskie liudi* (townsmen), and belonged to the so-called *posadskii mir* (town commune). The later *gosti* were clearly distinguished from *posadskie liudi* and came near to the service class in rank. That a merchant could become a *gost'* only if the Czar bestowed a charter upon him, signifies his special status, distinct from the *posadskie liudi*. 2) There are definitive distinctions in the kinds and the number of their privileges and duties. 3) The 17 th century *gosti* were, with a few exceptions, concentrated in the capital city of Moscow. It is not clear whether in the 14–15 th centuries, *gosti* were scattered throughout the whole country, but numbers of them existed in such cities as Tver', Novgorod, Pskov and Nizhnii Novgorod as well as Moscow. In the 16 th century they occurred too in many other cities like Kolomna, Murom, Kazan' and presumably Vologda, Riazan', Velikie Luki, Dmitrov.

Those differences show that the *gosti* underwent a significant transformation in the 16 th century. The 17 th century *gosti* were not a mere product of the natural growth of their predecessors.

What then caused such a radical change? During the reign of Ivan the Terrible,

especially during and after the *oprichnina*, Russia's socio-economic structures sharply changed: most importantly, serfdom was firmly established. The *posadskie liudi*, the *gosti* included, could not help being affected too, as P. P. Smirnov excellently showed. But besides such a general tendency attention is focussed on the phenomenon of *vyvod*, that is, compulsory movement of population. This policy was not characteristic of Russia only, but it is also true that it was very often adopted in newly occupied areas by Muscovite princes beginning with Ivan the Third. I stress the influence of this policy, especially in the reign of Ivan the Terrible, on the fate of the *gosti*. Wishing to make of Moscow the sole economic center of the state, he compelled the *gosti* and other merchants to migrate to the capital. The Czar attained his goal but the Russian merchant elite lost its freedom. It could not grow up vigorously enough to promote the capitalistic development of Russia, some elements of which could already be observed in the 16th century in some north-eastern provinces.